



Title	近代ハンガリーの児童文学と女性をめぐる一考察 : 『フローリの本』とその時代
Author(s)	岡本, 真理
Citation	ハンガリー研究. 2025, 3, p. 37-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代ハンガリーの児童文学と女性をめぐる一考察

—『フローリの本』とその時代—

岡本 真理

1. はじめに

ハンガリー文学のなかで児童文学とは何を指すのか、またいつ児童文学が始まったのかについて、明快な答えを見つけるのは難しい。その理由の1つに、広く認知されたハンガリー文学史の中では、そもそも児童文学が取り上げられてこなかったことがある (Szerb 1934, Sótér et al. 1964, Klaniczay et al., 1982, Gintl et al. 2010)。いわゆる「公式な」文学史はひとえに大人のために書かれた文学のためのものという前提によって成り立ってきたともいえる。2 つめに、児童文学がもつ多義性があるだろう。児童文学を元来子どもの読者を対象に書かれた場合に限定するのか、または作者の意図に関わらず子どもや青少年を主題とする作品が後世に児童文学や少年少女文学に分類されるようになった場合も含めるのか、といった問題である。上記のいわば「公式な」文学史には、結果として後者のタイプの文学作品だけが収められてきた¹。3 つめの問題として、子ども向けに書かれた物語が、民俗学や学校教育という異なる領域と隣合わせ、または重なり合ったりしながら発達してきたことがあるだろう。19 世紀なかばに本格的に収集が始まった昔話やその発展形ともいえる子ども向けの物語、そして学校教科書の読み物を児童文学として扱うのかどうかという問題である²。

以上は児童文学の定義に関わる問題であるが、4 つめの、より社会的な問題は、児童文学の担い手の多くが女性であるという事実から生じるものである。つまり、女性そのものの存在がハンガリー文学史の本流のなかに長い間ほとんど認めることができないのである。実際のところは、18 世紀から女性の書き手は散見されたが、その多くは大貴族の妻として、

彼女らの手になる書簡や日記などが結果として後世に残ったかたちをとる³。また、近代に入ると、啓蒙的貴族やブルジョアジーの家庭に生まれ育ち、教養を身につけた女性たちがペンを取り始める。しかし、そのような女性たちが書いた文章の多くもまた手稿のまま、いわば「引き出し」に保管された。

長く文学の書き手も読み手もドイツ語を中心としていたハンガリーでは、子ども向けの本の多くもドイツ語で書かれたり、ドイツ語からハンガリー語に翻訳されたりしたものが中心であった。19世紀に入り、読者層がドイツ語を使用するごく限られた上流層からハンガリー語で読み書きする市民層に広がったことにより、ハンガリー語による児童文学が一気に花開き、広く書き読まれるようになった。

そのような中、本稿で取り上げる『フローリの本 (Flóri' könyve, 1836, 1840)』が、しばしばハンガリー語初の児童文学と評されてきた (Pintér 1930, Nemeskürty 1983, Fábri 1996)⁴。本稿ではこの『フローリの本』の作者ベゼレーディ・アマーリアの生涯をたどり、彼女が遺した2つの作品を紹介する。そして、その内容を詳しく見てみることで、これをハンガリー文学史における「児童文学のはじまり」とする位置づけを問い直してみたい。またそれを通して、彼女や同時代の女性の書き手たちがどのような立場にあり、どのように文学と関わっていたのかを明らかにしたいと思う。

2. ベゼレーディ・アマーリアの生涯とその時代

ベゼレーディ・アマーリア (Bezerédj Amália, 以下アマーリア) は1804年、ハンガリー西部ヴェスプレーム県で法律家であり国会議員も務めた父親と、当時大人気を博したロマン派抒情詩『ヒムフィの恋 (Himfy szerelmei)』で知られる作家キシュファルディ・シャーンドル (Kisfaludy Sándor) の義妹であった母親のあいだに生まれた。アマーリアは、幼少の頃からいくつかの外国語、器楽の演奏、歌や作曲の教養も身につけるなど、恵まれた環境で育った。1821年17歳の時に、遠縁で父の法律事務所の見習いであったベゼレーディ・イシュトヴァーン (Bezerédj István、

以下ベゼレーディ)と結婚した。その後、ベゼレーディは 1830 年に自身の出身地であるハンガリー中南部トルナ県セクスアルド選出の議員となり、夫婦は国会のあるポジョニ（現在のスロヴァキア・ブラチスラヴァ）に生活拠点を移す。しかし、アマーリアは早くから肺病を患い、1834 年に娘が誕生すると、首都の社交生活を避け、娘とともにトルナ県の領地に引きこもり、療養生活を送るようになる（Kurucz 1994: 16-19）。

アマーリアがいつ頃から保育の問題に関心を持つようになったのか定かではないが、時代も彼女の置かれた環境も、幼児保育の必要性を認識するという意味で大きな転換点を迎えていた。1828 年にはブルンスヴィク・テレーズ（Brunszzvik Teréz）によってブダに保育園が設立された。これは、ハンガリーはもとより、ハプスブルク帝国における最初の保育園であった（Csifárry 2021）。ハプスブルク政府高官も務めたブルンスヴィク伯爵家の出身であった彼女は、多くの進歩派政治家らと交流し、保育や女子教育の必要性の議論を活発化させた。この運動は近代ハンガリーナショナリズムの興隆、すなわち母語による優良な幼児教育がハンガリー国民の形成に欠かせないものとする思想と密に結びつくものであった。ブルンスヴィクはこの頃保育園に並んで、保育士を養成する学校や貴族の子女を家庭で教育する役割を担う家政婦をハンガリー語で養成する学校も計画し、短期間であるが実現もした（Kéri 2018: 394-395）。また、彼女は生涯にわたって 100 を超える保育園を作り、その影響はドイツにも広がった（Fábri 1996: 44-45）。彼女に賛同した人々の中には、啓蒙貴族として知られるフェシュテティチや、のちに 1848 年革命を率いたコシュート、その政府で教育大臣を務めたエトヴェシュ、トランシルヴァニアの進歩派貴族ヴェシェレーニなどがいた。彼らはハンガリー語で行う幼児教育を一般民衆教育の基礎であり、国民文化政策にとって重要な課題であると位置づけていた（Kurucz 2002:11）。また、女性たちの保育運動は女性の教育運動にもつながり、カラチ・テレーズ（Karacs Teréz）やテレキ・ブランカ（Teleki Blanka）といった女性たちが私財を投じて女子学校の設立と運営を始め、やがて 1848 年革命に向けて女性の教育権や解放を求める政治活動へと身を投じていく（Evva 1933, Sáfrány 1963）。

このように 1830～40 年代のいわゆる「改革期」とよばれる国民形成期のハンガリーでは、ハンガリー国民の政治的権利要求とハンガリー語による民衆のための保育や教育、そして女性の権利追求が相互に関連しながら強まっていた。

アマーリアはおそらくポジョニの社交を通してこのブルンスヴィク・テレーズとも親交を持ったと考えられる。また夫ベゼレーディの影響も計り知れない。彼は進歩派議員として、1830 年から国会の場で農奴やユダヤ人の解放、貴族の免税廃止、出版の自由やハンガリー語の権利促進など多方面にわたる改革案とともに、初等教育の問題についても構想を打ち出した (Kéri 2018: 399, Kurucz 1996: 98-100)。アマーリア自身は決して社会の表舞台に立っていたわけではないが、彼女の社交関係や夫との協力関係が、その後の保育園の実験的経営につながったと考えられるだろう。

さて、アマーリアは娘を連れてポジョニを離れた後、地元の領地に建つ館に居を構えた。といってもそこは周囲に何も無いプスタ（ハンガリー大平原のいわゆる「荒野」）であった⁵。そこで彼女は自分の娘と領地内の農民の子どもたちをともに保育する保育園経営に取りかかった。これは、貴族と庶民の社会階層の壁を取り払って保育するという、当時としては先進的で実験的な実践といえる。また同時に、わが娘フロリアーナに捧げる『フロリの本』や、自らの保育への考え方を記した物語『フェルデンシ家の夕べ』を書いた。これらはアマーリアが 1837 年自病の悪化のため若干 33 歳で 3 歳の娘を残してこの世を去ったあと、夫によって 1840 年に出版され、世間の知るところとなった。そもそも彼女自身が公表することを予定していたのかどうかも明らかでないが、この出版によって『フロリの本』は多くの読者を獲得した。1872 年までの 30 年あまりで 8 版を重ね、その後改訂され、1926 年までに 16 版を重ねるといふ、それまでに例を見ないベストセラー作品となったのである (Kurucz 1994)。これに続き、同年のうちに『フェルデンシ家の夕べ』もまた同じ出版社から発行された⁶。

アマーリアの死後について触れておくと、彼女の病時の看病や娘の世

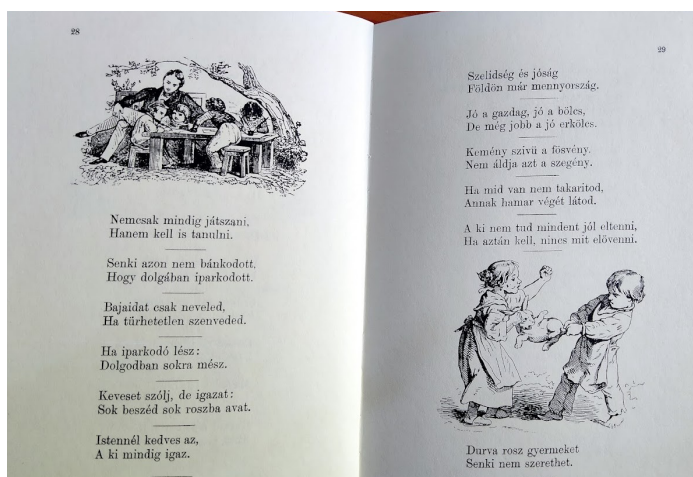
話を一身に請け負った妹エテルカがその遺志を引き継いだ。しかし、本のタイトルにもなった娘は、10歳で夭逝した。その後、エテルカは義兄と結婚し、その活動を支えた。ベゼレーディの活動についていえば、彼は妻の死の頃から議会で初等教育の総合的改革を進める委員会を立ち上げ、政策提案を任されるまでになっていた (Kéri 2018: 399-400)。1844年国会ではペシュトに保育士養成学校設立のための寄付金を呼びかけ、実際の運営監督責任者に就任し、また自ら総括的保育理論の専門書を著すなど、国の保育政策と保育士養成政策の両方で主導的役割を果たした (Kurucz 2002: 34-48)。しかし、1848年革命が勃発すると、これに続く自由戦争でコシュート臨時政府とともにデブレツェンに移動し、敗戦後は政治犯として逮捕され、全財産の没収と死刑判決を受けた。エテルカは夫の恩赦と釈放のために奔走し、その後ひっそりと隠居生活を送った。しかし夫の死後、その生前から力を入れていた養蚕技術を受け継ぎ、トルナ県の絹織物産業の振興に携わった。そして、万博で得た絹織物の金賞を基金として貧しい子どもへの奨学金を設立するなどの社会貢献に生涯を捧げ、81歳で生涯を閉じた (Kurucz 1994: 20-22, Markó 2001: 720-721)。

3. アマーリアの2つの読み物

3.1 『フローリの本 (Flóri könyve)』

すでに言及したように、ハンガリー文学史では児童文学の始まりとしてたびたびこの『フローリの本』に言及される。この本はほとんどのページに挿絵が豊かにあしらわれ、内容は実に多様である。最初にアルファベットが導入され、続く10ページは大きな文字で音節ごとにハイフンで区切られた文章が並び (Á-dám volt az el-só em-ber. 「アダムが最初の人間でした」)、幼い子どもが読む練習をするよう書かれている。これに続き、全体の3分の1におよぶページ数が割かれているのが2行詩の詩集である。これらは説教集ともいう内容で、親や教師に従順であること (「親に喜びを与える子どもは／この世で大いに報われます」「親と先生によく従いなさい／それが最大の感謝です」)、勤勉であること (「いつも

遊ぶだけでなく／勉強もしなければなりません」「働き者になりなさい／大きく進歩します」)、よい行いを心がけること（「自分のものは片づけましょう／他人のものは取りません」「口数少なく正直に／おしゃべりは悪です」)、信心をもつこと（「他人に善く思いやりなさい／神さまの祝福がもらえます」「どこに隠れようと／神さまから身を隠すことはできません」）など、子どもが家や学校、遊びや学びのなかで身につけるべきさまざまな良識や道徳を、2行という短いフレーズで並べ連ねている。



『フローリの本』より（筆者撮影）

これにユーモア詩やなぞなぞ、草花や動物図鑑、あそび歌、四季の詩などが続く。後半ではより年齢の高い子ども向けと思われる天体、歴史、またヨーロッパ地図を添えた各国地理を学ぶ章があり、続いてトルコとの戦争やマーチャーシュ王、トランシルヴァニアやペシュト＝ブダをはじめハンガリー各地の町や風物が話題に取り上げられる。そして最後に、ケルチェイの詩 *Hymnus* とその楽譜（エルケルの作曲であり現在のハンガリーの国歌）、および 25 編の歌とその楽譜で締めくくられる。このように、『フローリの本』はハンガリー語の読み方に慣れさせることに始ま

り、詩によって道徳観の育成と子どもをとりまく世界に関する知識を与え、やがてハンガリーの歴史や地理の知識、ハンガリー一国民文化への理解へと段階を踏んで発展していくように構成されている。

『フローリの本』は幼い子どもたちが絵と詩や歌を通して身の回りの生活におけるさまざまな事象を楽しく学ぶこと、そして道徳的な倫理観を身につけさせることを意図していることが窺える。それは物語性のある児童文学ではない。母語を通して楽しく百科全書的な知識を子どもに与え、正しく行動する善良な人間を育成するという、コメニウスの汎知学の流れを汲んだ教科書的な性格が強い読本といってよいだろう⁷。

3.2 『フェルデシ家のタベ (Földesi estvék)』

『フェルデシ家のタベ』(以下『タベ』)は、『フローリの本』に比べてより年齢の高い少年少女向きに書かれている。タイトルにあるフェルデシ家には夫妻と4人の子どもがいるが、母親がその中で重要な役割を占めている。都会から何もない大平原のプスタに越してきた家族が迎えた最初の冬、雪に閉ざされた夜の過ごし方に戸惑う子どもたちに、フェルデシ夫人が「毎週日曜日の夜に近所の子どもたちを招いて、お話しのお会を開きましょう」と提案するという設定である。第1夜から第6夜まで戯曲の形式で綴られ、各話では夫人または近所の子どもたちの親が順番に語り手となって、さまざまな子どもが登場する物語を語り聞かせるという構成である。

第1夜は、極端に恥ずかしがりで臆病な兄妹の物語である。両親が不在の時に家を訪れた大柄の男に兄妹は恐れをなして、居留守を使ってしまう。男は実は大金持ちの親戚であったが、子どもたちの無礼に腹を立てて去ってしまう。やがて父親が破産して一家は困窮し、兄妹もやむなく外に出て働き始める。兄は父に伴い外国での商談を学び、妹は帽子屋で懸命に働き、評判の針子になる。2人の優れた行いを伝え聞いたこの叔父は財産を分け与え、一家はふたたび幸福を取り戻す。この話では「極度な引っ込み思案はよくないこと」「人とのコミュニケーションをしっかり取ること」また「人生にはいつ危機が訪れるかわからないので、少年

も少女もみな手に職をつけることの大切さ」を教訓にしている。

第2夜は、英国の商人とその息子の物語である。成長した息子は父とともに船に乗るが、インドネシアで難破する。ジャングルで飢餓などの度重なる試練を乗り越えた息子は英国に戻り、大型船の船長となってふたたび父親を救助しに向かうという少年の成長と勇敢な行いを物語る。

第3夜は、親に甘やかされ放題の少女の話である。わがママがついに親の手にも余り、娘は矯正のため隣人夫婦に預けられる。婦人は自分の娘たちとともにこの少女を厳しく教育し、労働することや学ぶこと、足るを知ることの大切さを教え、やがて生まれ変わったように素直で思いやり深い少女になるという話である。

このように、各話かなりの長さの少年少女に向けた教訓めいた物語が続いたあと、唐突に保育についての話題が始まる。第3夜の物語が暖炉の火を囲み座る子どもたちに向けて語られた直後、雪の中で凍えた隣人の子どものがこの部屋に運び込まれるという事件が起こる。母親が豚の屠殺仕事のため一日じゅう家を空け、子どもたちの預け先がなく家で留守番をさせていたが、末っ子が雪の中を外に出て迷子になったという。そこで突然フェルデシ夫人が「実際このようなことが庶民のあいだに起こるのです。今この目の前の出来事が、私がずっとこの胸に温めてきたことをお話しするきっかけを与えてくれます」と切り出し、保育の必要性について語り出すのである。

「それは幼児保育施設という名称で、その主な目的は、日々の糧を得るために子どもたちをやむなく家に置き去りにして面倒を見ることができない貧しい親たちのために、子どもを看護し、彼らの能力を伸ばし、その能力に応じた活動を提供する場所です。」

(Bezerédj 1840b: 114)

これに続き、フェルデシ夫人は保育の具体的内容を語り始める。保育は貧しい親が目を見守る隙に子どもが危険な目に遭わないようにすることが第一議的な目的であり、学びはその次であること、昼食を持参して

一日中過ごせる場所で、食事の前の手洗いや清潔なタオルで手を拭くといった衛生意識を親子ともに身につけさせること、子どもの集中力は30分ほどしか持続しないため、身体を動かしながら楽しく遊ぶことが重要であること、などである。

続く第4夜の話は、その全体が保育論の展開となる。フェルデシ氏が設立予定の保育園の先生となる男性を紹介するところから始まる。フェルデシ夫人は議論の発起人ではあるが、議論はすぐにその場の男性たちに引き継がれる。ここで語られる保育園構想はおおよそ次の2点に要約される。1 つは子どもの主体的な興味を引き出す保育である。保育はあくまで遊びながら楽しい気持ちにさせることを主眼とし、どんなに優れた教師でも表面的でなく心から自然に機嫌よく接しなければ子どもは言うことをきかない、罰を与えることは極力避け、子どもが自ら喜んで通えるようにすること、などが論じられる。2 つめは貧しい子どもたちの衛生状態の確保である。保育園には2〜7歳のすべての家庭の子どもが通えること、貧しく身なりの汚い子どもは体を洗い清潔にしてやることが重要であると語る。つまり、子どもをつねに機嫌よく楽しませるとする「精神的尊厳」と、衛生状態の確保という「身体的尊厳」の2つを重要な保育理念として掲げている。そして第5夜では、いよいよ保育園をこのブスタに設立することを決定し、その場に集う大人たちだけでなく、子どもたちも先生から保育の研修を受けて、喜んで保育園を手伝いたいと次々に手を挙げるのである。

しかし、『タベ』は第6夜で突然終わりを迎える。第3夜までの寓話的物語と第4夜、第5夜の保育論がそれぞれ30〜40ページというかなりの長さで語られるのに対し、この第6夜はわずか1ページである。突然病床に伏せるフェルデシ夫人の記述から始まる。そして、夫と子どもたちの必死の祈りも空しく、神は彼女を天に召したこと、楽しい冬の夜の集いも打ち切れ、保育園構想も立ち消えとなったことを述べて物語は閉じられる。

『タベ』の主人公であるフェルデシ夫人は明らかにアマーリア自身と思われ、この物語で彼女は自身の考える保育の理想を語っている。冗長

的でまとまりのない、物語とも保育論ともつかないような、ある種奇妙な本書の構成を見ると、おそらく彼女自身もこれを公にするつもりではなく、保育園設立に向けた構想を自身のために書き溜めようとしていたと考えられる。これに対し、主人公の死を語る短い最終話はまったく趣が異なる。これは、彼女の死後、遺稿を出版する際に夫ベゼレーディが書き加えたと考えるのが妥当であろう。

4. まとめ

以上、ベゼレーディ・アマーリアの生涯を当時の社会状況と著作出版の背景を含めて紹介し、2つの著作を児童文学や保育理論という観点から考察した。『フローリの本』はハンガリー近代文学で「最初の児童文学」としばしば紹介されるが、その構成と内容を見れば文学作品ととらえるには相当に違和感が残る。むしろこれは、当時幼かった娘に実際に読み聞かせると同時に、彼女の実験的保育園で使用される教本であり、保育教材にすることを想定していたと考えられる。『夕べ』では、アマーリアは自身が思い描く保育の理想像について、登場人物らに熱く語らせている。この作品も物語、戯曲、保育論が混じり合うなど著しく一貫性を欠き、ある種独特の雑多な形式と内容をもつ。ひとつの文学作品として完成されたとはいえず、散漫に書き溜めた文章にとどまっている。彼女の死後、夫の熱意と尽力によって、いわば本人のあずかり知らぬところで公に知られるところとなったと考えられる。そのため、これらの作品はどこか「不用意に」日のもとにさらされたような印象を与えるのである。明らかに中断されたとみられるこの書を彼女がこの後どのように書き進めていくつもりであったか、もはや知ることはできない。ただ、ここにはいつか実現させようと彼女が思い描いた保育園構想、保育理論の粗削りの片鱗といったものがはっきりと見て取ることができる。

以上のことから、まれに見るロングセラーとなった『フローリの本』は、象徴的な表現として最初のハンガリー児童文学と称されるかもしれないが、実際にこれを児童文学作品と定義するのは適当ではないと結論づける。

5. おわりに ～『フローリの本』の時代の女性の書き手たち

『フローリの本』の著者だけでなく、近代初期の女性の書き手たちは内に秘めた熱いメッセージを持ちつつも、流れの中に偶然に浮上した「断片」のように、文学史の周辺を遠慮がちに彩るにとどまっている。例えば 1840 年代に人気を得たさまざまな流行紙 (divatlapok)⁸ を見ても、その読者の多くは女性であるものの、執筆と刊行に携わるのはすべて男性であった。女性の書き手はごく稀であった。その一人で後に生涯を女性の権利向上のために尽くしたカラチ・テレーズ (Karacs Teréz) は、すでに 10 代の頃から母親のサロンで知識人との交流を通してさまざまな流行紙に詩や文章を発表するようになったが (Fábri 1996: 49-51)、その彼女も女性教育について書くときはなるべく硬い文体にならないように気を遣い、女性解放についての文章を発表するときは女性と判らないようにペンネームを使用したという (Kéri 2018: 340)。また、国民的詩人の妻として注目を浴びたセンドレイ・ユーリア (Szendrey Júlia) が流行紙 Életképek に発表した旅行記の記事は、本人ではなく夫が彼女の日記から抜粋したものであった (Fábri 1996: 73)。

このように、近代初期のハンガリー社会では、女性の書き手がまだほとんど認知されなかっただけでなく、女性たち自身もまだ主体的に自らの文章を世に問おうとする意識を持たなかった。女性は親や夫の社交関係の中でのみ社会とのつながりを持ち、文章を書く数少ない女性たちもそれを積極的に公表するすべを持たなかった。ベゼレーディ・アマーリアの 2 つの書が後世に遺されたのは、保育政策という共通の目標を持つ夫を通して出版が実現した結果であり、まれに見る幸運な例であった。近代ハンガリーの女性と文学をめぐるこのような社会状況が変化しはじめるのは 1860 年代ごろであり、女性たち自身が女性向け雑誌を次々刊行し、また女性教育の普及のためのさまざまな社会的活動が盛んになっていく。それについてはまた稿を改めて検証したい。

謝辞

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究（C）「国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成」（課題番号 19K00498、研究代表者：岡本真理、平成 31 年～令和 5 年）の助成を受けています。

注

1 19 世紀でいえば、Fazekas Mihály による貧しい少年が主人公の寓話的叙事詩『がちょう飼いのマティ（Ludas Matyi）』（1817）、Petőfi Sándor が親友 Arany János の幼い息子に語り聞かせる内容の詩「アラニユ・ラツィヘ（Arany Lacinak）』（1847）または叙事詩『勇者ヤーノシュ（János vitéz）』（1844）、Gárdonyi Géza の対トルコ戦争時代を舞台に少年少女を描いた『エゲルの星（Egri csillagok）』（1899）などが、児童文学として捉えることも可能である。

2 ハンガリー語の民話の収集は 19 世紀初頭から徐々に活発となり、1840 年代には Erdélyi János や Kriza János によって民話も含む大規模な民謡集が編纂されたが、特に後者には昔話が多く含まれる（岡本 2023: 71）。読み方を学ぶ教科書は、いわゆる ABC 本としてその歴史は古い。宗教改革と聖書のハンガリー語訳が始まる 16 世紀に始まり、17 世紀にはコメニウスの『世界図絵』がシャーロシュパタクにおいてハンガリー語訳された。18 世紀後半には、マリア・テレジア時代の啓蒙主義的改革による初等教育の普及により、大量の教科書が出回った（Drescher 1934: 18-21）。

3 例えば、17 世紀初頭には大貴族 Csáky István の妻 Wesselény Anna はハンガリー語でしたためた多くの書簡を残し、やはり大貴族 Eszterházy Miklós の妻 Nyári Krisztina はごく断片的な日記を残した（Fáylné: 11-19）。また、ラーコーツィ 1 世の妻 Lorántffy Zsuzsanna は 17 世紀半ばにプロテスタント勢力の中心地シャーロシュパタクに印刷所を設け、コメニウスを招へいし、その書物の印刷を熱心に支援しただけでなく、自らも教理問答書を書くなどし、ハンガリーでその著作が印刷された最初の女性となった（Bánhegyi: 23）。

4. 実際のところは、同時代の Döbrentei Gábor が書いた『パリとミンカの読み方勉強（Pali és Minka olvasni tanul）』は『フローリの本』より先の 1829 年に出版されている。しかし、その存在は長い間忘れられていた（Drescher 1934: 23-24）。それ

に対し、『フローリの本』は類まれな息の長いベストセラーとなり、後世多くの文学者らが自らも子供時代に読み親しんだなど、記憶に直接深く刻まれたため、「最初」の子どもの本であると考えられやすかったという (Elbe 2021: 12-14)。

5. ベゼレーディ家の館はセクスアルドから西に約 10km、Szedres 郊外の Hidjapuszta にある。敷地内にはベゼレーディの死後、未亡人によって礼拝堂も建てられた。20 世紀に入ると長く放置され廃墟となったが、基金による改修工事の後、2005 年に児童養護施設が開設された。現在 12~18 歳の子どもたちが共同生活を行う。

https://epa.oszk.hu/03400/03457/00068/pdf/EPA03457_csalad_2007_3_030-035.pdf

6. 『フローリの本』および『フェルデシ家のタペ』の初版はいずれも Heckenast 出版社から出され、前者にふんだんにあしらわれた挿絵の作者は不明で、後者に唯一挿入されたカラー版画は 19 世紀を代表する画家 Barabás Miklós の手による (Drescher 1934: 44-46)。

7. コメニウスの子どものための教科書『世界図絵 (Orbis Sensualium Pictus)』(1658 年) は、ヨーロッパ各国語に翻訳され、学校教科書として広く使われた。18 世紀には聖書に次ぐベストセラーともいわれた。挿絵をふんだんにあしらい、身近な事物から世界のさまざまな事象までを扱う。「世界の基本的な知識をよろこびをもって学ぶ」とする汎知学の基本思想にもとづく教科書としている (井ノ口 1984)。

8. 流行紙 (divatlap) は、政治紙とは違い雑多な生活情報とともに詩や連載小説を掲載した娯楽紙である。「流行」とは、フランス発の女性の最新の服飾を描いたカラー版画を巻頭に掲載したところから名付けられた。ブルジョアの女性読者を中心に 1840 年代までに急成長し、1848 年革命期には民族主義者・独立系共和派の公論の場となった (岡本 2015)。

参考文献

Bánhegyi, Jób (1939) *Magyar író nők*. A Szent István társulat, Budapest.

Bezerédj, Amália (1840) *Flóri' könyve sok szép képekkel, földrajzokkal és muzsika melléklettel*. Heckenast, Pest. <https://www.scribd.com/document/497906584/Flori-Konyve> (2025 年 1 月 28 日最終確認)

- Bezerédj, Amália (1840) *Földesi estvék. Olvasókönyv a 'magyar ifjúság' számára.* Heckenast, Pest. <https://mek.oszk.hu/19000/19010/19010.pdf> (2025. 1. 28. 日最終確認)
- Csiffáry, Gabriella (2021) 1828. június 1-jén nyílt meg az első magyar kiseddóvó. *Budapesti levéltári mozaikok* 15. https://real.mtak.hu/161764/1/BLM_2021_15.pdf (2025. 1. 28. 日最終確認)
- Drescher, Pál (1934) *Régi magyar gyermekkönyvek 1538–1875.* A Magyar bibliophil társaság, Budapest.
- Elbe, Hajnalka (2021) *Kárpátaljai magyar gyermekirodalom.* Intermix, Ungvár-Budapest. https://karpataljaiadatbank.com/wp-content/uploads/2022/04/Elbe_Gyermek_001-111.pdf (2025. 1. 28. 日最終確認)
- Evva, Gabriella (1933) *A magyar nőnevelés két úttörője. Karacs Ferencné és Karacs Teréz nőnevelési nézetei.* A Magyar Király József Ferenc Tudományegyetem pedagógiai intézet. 4. szám. Szeged.
- Fábri, Anna (1987) *Az irodalom magánélete. Irodalmi szalonok és társaskörök Pesten 1779-1848.* Magvető, Budapest.
- Fábri, Anna (1996) „*A szép tiltott táj felé*”. *A magyar írók története két századforduló között (1795-1905).* Kortárs kiadó, Budapest.
- Fáylné-Hentaller, Mariska (1889) *A magyar íróknőről.* Budapest.
- Gintl, Tibor (főszerk.) (2010) *Magyar irodalom.* Akadémiai kiadó, Budapest.
- Kéri, Katalin (2018) *Leánynevelés és női művelődés az újkori Magyarországon.* Kronosz kiadó, Pécs.
- Klaniczay, Tibor (szerk.) (1982) *Magyar irodalom története.* Kossuth könyvkiadó, Budapest.
- Kurucz, Rózsa (1994) *Bezerédj Amália és Bezerédj István a gyermekekért.* Szekszárd.
- Kurucz, Rózsa (1996) *Bezerédj István 1796-1856.* Babits kiadó, Szekszárd.
- Kurucz, Rózsa (2002) *Az első magyar óvóképző 1837-1843.* Babits kiadó, Szekszárd.
- Markó, László ed. (2001) *Új magyar életrajzi lexikon.* Magyar könyvklub, Budapest.
- Nemeskürty, István (1983, 2012), *A magyar irodalom története.* Szent István társulat. Budapest.

Pintér, Jenő (1930) *A magyar irodalomtörténet*. Magyar irodalomtörténeti társaság, Budapest.

井ノ口淳三 (1984) 「汎知教科書としての『世界図絵』」『島根女子短期大学紀要』22: 105–114 頁.

岡本真理 (2015) 「近代ハンガリーにおける新聞の発達と 1840 年代の流行紙」『ウラリカ』16: 35–54 頁.

岡本真理 (2023) 「エルデーイとクリザー—19 世紀なかばの 2 つのハンガリー民謡集」『ハンガリー研究』2: 63–78 頁.